

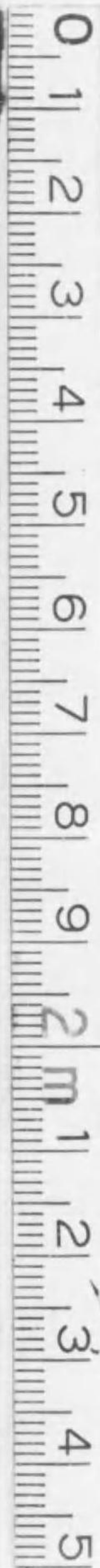
特 252

279

田中香涯著 (還曆記念)

歌集
草
籠

始



特252
279

はしがき

讀書執筆の傍ら折にふれて詠みおきし和歌のうちよ
 り、四季戀雜のわかちも無く、思ひいづるが儘に數十首
 ばかり書きつらねおきたるを、こたび還暦の歳を迎へ
 ば、かり書きつらねおきたるを、こたび還暦の歳を迎へ
 たる記念にとて、そのまゝ印刷に附しおほけな
 知諸彦に呈上することゝはなしつ。歌人にもあ
 の歌集を手にとりて、つたなき歌のしらべに笑ひ興
 るも亦た興ならんかし

昭和九年春

田中香涯





還曆述懐

言の葉の藻屑ばかりをかきつめて

机の島に身は老いにけり

つくくと思へばわびし徒らに

空しき名のみ世に知られつゝ

なほ十こせ生きてあらんと思へども

常なき世なり神にまかせん

歌集 草 籠

田 中 香 涯

我がせこのくるを遅しと待つ門の

しだり柳に雨こぼれきぬ

駒こめてふりかへり見る古る里の

み空の月に啼くほこゝぎす

松のつゆ風にこぼれて池みづの

輪をかく波に藤のはな散る

琴をひく影ほの見えて小簾の外の

柳にかすむおぼる夜の月

薫りくる梅が香ゆゑに明けて寝し

窓にも月のさす夜なりけり

湯がへりの姿なまめくたをや女の

蛇の目の傘に春さめぞ降る

四

なりひゞく除夜の鐘の音百七つ

残る一つに年もつきぬる

川添ひのすゞみの床のひぢ枕

ねぶらんこそすれば月傾きぬ

いつく島夕しほ今や満ちくらし

朱の鳥居に千どり群れたつ

おぼろ夜に妹がり行けば衣紋阪

まづ靡きよる青柳のいこ

春風のふくべを假りのまくらにて

酔ひ心地よき花の下ふし

五

石をうつ音のきこえてあづま屋の

窓の吳竹雨しづかなり

くらかりし窓に月影さし入りぬ

若葉や風にひるがへりけん

すて置きし古る短冊も取りいで、

歌おもはるゝ此の月夜かな

はした女のすてし枯れ菜もかをるらん

梅の花ちる里川の水

むら山を青海原になぞらへば

富士は白帆を見るべかりけり

さして行く山路やいかに積るらん

重さおぼゆる笠のしら雪

ひこ葉ちるやなぎの枝に二つ三つ
ひかる螢の影のさびしさ

山かげになびく朝げのうす煙り
夜半の落葉を掃きてたくらん

庭の池に躍る緋鯉のみづ音も
聞きこるまでに夜は更けにけり

賣れのころ夕刊もちてかへる子の
つゞれの袖に寒き風吹く

更けわたるさむき霜夜に辻車
すゝむる車夫は古い人にして

いくたびか夢のうき橋かけかへて
渡れど明けぬ秋の夜ながさ

吹そよぐ夕かぜ涼しかど柳

すがる螢のかげもなびきて

うづもれて跡こそなけれ蜩川

あだ名ばかりは世に流れつゝ

九だん阪風にきよくも散る花を

わが友なりと神や見るらん

朝まうで汲む御手洗の水清み

先づあらたまるわがこゝろかな

めをこ岩友しらがこもなりにけり

二見の浦の雪のあけぼの

朽ちのこる卒塔婆がもこの秋草に

誰が涙こか露のおくらん

あらしひし山とも見えず耳梨も

香具ものどかにうち霞みつゝ

咲きそめし野山の花をおもひ寝の

夢にさはらぬ春の夜のあめ

のろひ釘うちしあこある野やしるの

古い杉凄し片割れの月

佐保川のつゝみの霜をふみ分けて

千鳥なく夜の月も見しかな

小夜ぎぬた音のみだれて身にしむは

落葉ごろもや霜にうつらん

詩に歌に詠みふるされて言の葉の

上にも松は千こせ經にけり

汽車かよふ道のひらけて浦ざこも

塩がまならぬ烟り立ちそふ

うづみ火に酒あたくめん我せこの

歸るころなり雪も降りきぬ

枯れ柳ひこもこ残る焼けあこに

雨降りいで、夕がらす啼く

下駄二つ橋のたもこにほの見えて

川風さむし片われの月

夕しぐれ降るもさびしき山のはの

雲に消えゆく鐘のおこかな

白絹に龍を糸がくこ見ゆばかり

汽車の烟りのかゝる雪の嶺

影と影はなれては又もつれけり

加茂の河原のおぼる夜の月

ほたる飛ぶ影見えそめて打ち水の

露ちる垣に夕がほの咲く

乳兒を脊にもらひ乳して歸りゆく

人かげさむし冬の夜の月

影うすき夕日うつらふ古る池の

みぎわの葦に秋風の吹く

人の世の罪もうらみも忘られて

神代おぼゆる酔ひごちかな

片耳につきし紅よりささられて

顯はれけりな秘めしわが戀

物の怪の住むてふ寺の古る井筒

其耳のくさくさのぞけば水の凄くひかれる

あたらしき柱ごよみに取りかへて

人の世の罪の老いも年待つ年の暮れかな

妹が門たゝきかねつゝ三たびまで

遠くまで日行き戻りけり秋の夜の月

夏しらぬ片山ざこの桐ばやし

朝のけしきも一葉ちるまで涼みてしがな

遠やまに虹たつ見えて夕日さす

岡の松ばら小雨ふるなり

傘と傘かさなり合ふて歌舞伎座の

木戸口せまし雨の降る日は

きのこ狩り山より山にわけ入りて
山なす程も取りえつるかな

すゞしとて幾夜仰ぎし月かげに
物おもはるゝ秋は來にけり

時くれば毛蟲も蝶さなるものを
いつ迄つらき心なるらん

酒もよしさかなに召さん鮎もよし
ひと日は訪はせ有岡のさと

心なく花を折りさる人こそは
吹く嵐よりつれなかりけれ

このゆふべ招く尾花の袖見れば
草も今宵の月や待つらん

姫小松枝おもしろく降りつみて

簪のはなと見ゆる雪かな

ひそみすむ龍のぼるらし渦まきて

雲ぞわきたつ青淵の上に

強いられずひこり静かに酌みてこそ

酒のうまさは味はれけれ

三

春の夜の夢路にまたも見つるかな

胡蝶も知らぬ花のおも影

吹く風にちらで残るこ見し花は

梢にねぶる胡蝶なりけり

あかゞねを黄金に見する贗せがねに

似たる博士の世に多きかな

三

欺くこ名にこそ立てれ玉と見ば

玉にかはらぬはちす葉の露

錦きてかへれこばかり古る里を

いでたつ袖にちるもみぢかな

吉野やま春のほかなる月かげも

霞むこのみや見そなはしげん

友の乗る船にわかるゝ心地して

島がくれ行く月を見るかな

のどかなる都の春に降る雪は

上野の花の散るにぞありける

歌を詠むをこ女ありげに見ゆるかな

山吹さけり庵のま垣に

田中香涯著書目錄

◎專門醫書

- 病理學總論 (八版)
- 病理解剖學提綱 (五版)
- 臨牀病理學 (七版)
- 法醫學講義 (七版)
- 續法醫學講義 (三版)
- 獨逸文病理學粹
- 病逸文病理學纂錄
- 免疫學論講集
- 病理學實驗論集

◎語學書

- 醫事和文獨譯指針 (三版)

◎醫史書

- 明治大正醫學史 (二版)
- 大學派と北里派との學問的衝突史

◎隨筆書

- 醫學斷片 (三版)
- 人性の醫學的觀察 (二版)
- 醫學以外醫學
- 醫學事一夕話
- 醫學事奇聞異談
- 優生學と人生
- 醫海涓滴

- 偉人名流の疾病と死因
- 現代社會の種々相

◎通俗雜書

- 間違だらけの衛生 (二拾版)
- 人體に關する面白き話
- 靈と肉
- 學術上より觀たる怪談奇話
- 近世性慾學講義
- 變態性慾
- 日本に於ける變態風俗
- 江戸時代の男女關係 (三版)
- 日本人の祖先
- 男女の分化

- 人性の暗黒面
- 愛慾に狂ふ痴人
- 女性と愛慾 (三版)
- 科學的仙術 (三版)
- 愛と殘酷 (二版)
- 趣味の生理及病理
- 通俗病理解講
- 夫婦の性的生活 (數版)
- 家庭新知識 (數版)
- 人體解剖圖 (三版)
- 寄生蟲及細菌學圖 (三版)
- 趣味の大眾科學 (數版)
- 健康

昭和九年三月 日印刷
昭和九年四月 一日發行

(非賣品)

兵庫縣川邊郡伊丹町伊丹三三四
著者兼 田 中 祐 吉
發行者

終

弘
榮
堂
印
行

55